

田村は横山にこう言った。

「横山先生、実は、先生のお母さんの怜子さんとは、お父さんの中村先生よりも、私の方が先に知り合いだったのです。かたちとしては、わたしがご両親を引き合わせたことになります。

とは言っても、ご両親の口からは、その辺の話はしにくいことでしょうから、いい機会ですので、私が話しましょう」

中村と田村は大学の同じ政治学講座の研究室の先輩と後輩であった。田村はたたき上げで今の地位を築いた土建屋とばかり思っていたが、父と同じ東都大学出身と聞いて横山は驚いた。

田村の父は、小さい不動産会社を営んでいた。田村は学者を目指したらしいが、父の急逝で、不動産会社を引き継ぐことになったようだ。そして、持ち前の才覚で、会社をいっきに大きくしていったという。

不動産会社と聞くと地上げを思い浮かべるが、田村は、決して地上げには関わらなかったようだ。田村の手法は簡単である。利用価値が高いが、放置されている土地にまず目をつける。そこに貸しビルなどを建設する。ただし、一般の不動産業者が建ぺい率ぎりぎりまで建設するのに対し、田村は、駐車場のスペースをゆったりとつくり、幹線道路からのアクセスを便利にした。

多くの業者は、どうしても、値段の高い土地は、ぎりぎりまで利用しようとするが、そのようなビルは使い勝手が悪いのである。せっかく立派なビルを建設しても、その前が路上駐車の手でうまってしまったのでは意味がない。

まわりの不動産仲間からは、せっかくの土地を無駄に使っていると、バカにされたが、結局、田村のアイデアがまさった。

ビルを借りる側にたつと、たつぷりと駐車スペースや作業スペースがある方が使いやすい。不況で空室がめだつような時代でも、田村の貸しビルは、つねに満室状態となった。

中村は、大学院に残って、やがて研究室の助手となった。中村は、田村の二年後輩であったが、よく気があったという。

大学時代には、田村が中村を引き連れて、大学の近くにある居酒屋によく通ったという。その時、話題になるのが、大学の閉鎖性であった。

「これからの大学は、国際的に開かれたものでなければならない」

これが中村の持論であった。

そして、当時はそれほど注目されていなかった国際政治学に傾倒していったのである。しかし、当時の大学の研究室は、教授が絶対専制君主であり、その

考えに少しでも異を唱えるものは徹底的に排除された。

中村の研究室の教授は、学者としては三流であったが、学内政治家としては一流であった。

中村は、研究室ではずばぬけて優秀であったが、それが教授の不興を勝ったようだ。決定的な亀裂は、中村の書いた国際関係論に関する論文が、ある新聞社の若手研究者を対象としたコンクールで最優秀賞を受賞したときである。

教授はかねてから、政治学の醍醐味は国内政治の派閥力学にあり、腹芸が大事であると主張していた。国際関係などを研究する田村は、弟子としては、もってのほかであったのである。

教授は中村に対し

「お前は天狗になりすぎている。頭を冷やすためにも少し修行をしてこい」と言って、私立大学の助教授に送り出した。

大学の助手から、助教授への転身であるから、表向きには栄転であったが、東都大学の助手をつとめ、将来の講座の教授と目されていた中村だけに、まわりの人間には明らかな左遷と映った。

力のある教授から排斥されたことで、中村からどんどん人が離れていった。彼らを責めることはできない。下手に中村に肩入れすると、自分たちが目をつけられる。有力教授の機嫌を損ねることは、自分たちの将来を閉ざすことにつながるからだ。

しかし、このような時にも田村は中村を励まし続けた。その頃には、田村の会社はかなり大きくなっていて、田村は

「お前の才能は俺が買っている。あのバカ教授がよからぬことを考えても、おれがお前を支援するから頑張れ」

そう言って、中村を励ました。田村は、自分が果たせなかった学者への夢を後輩の中村に託したのかもしれない。

中村に転機が訪れたのは、文化省が募集した海外研究員制度に合格したことにある。国費で米国に二年間留学できることになったのだ。

田村は、この知らせに喜んでくれた。ところが、中村が勤めている大学は、中村の留学に待ったをかけた。助教授の職を二年も休まれたのでは困るというのだ。

国立大学なら問題ないが、学生の教育が中心の私立大学では、教員の手当てがつかないというのである。

この窮地を救ったのが、学長であった。学長は、私立大学においても研究分野を拡充する必要があると考えていた。中村が専門としている国際関係論は、いずれ、看板学科になると踏んでいたのである。

学長の裁量で、中村の留学が認められた。そして、中村の国際的に幅広い人

脈は、この留学期間中に築かれた。当時は、世界各国からアメリカの大学に優秀な若者が集まってきていた。その連中が帰国して、国の中枢に座っているのだ。

実は、中村には知らされていないが、本当に中村の窮地を救ったのは、田村であった。

中村から

「せっかく文化省の留学制度に合格しながら、大学の事情で許可が下りない」と聞いた田村は、大学への多額の寄付を申し出たのである。

このおかげで、大学は中村が留守の間をしのぐことができたのだ。この時、田村は大学の新設を決心したらしい。従来のしがらみにがんじがらめになった大学では、新しい分野は生まれえない。こう痛感したのである。

田村としては、自分の大学に中村を呼びたかったようなのだが、それは遠慮したらしい。留学から帰った中村は、国際関係論でめざましい活躍を遂げた。持ち前の論理的思考に、アメリカ時代の人脈が加わり、その研究は厚みを増した。

しかし、中村の活躍に面白くない人間もいた。東都大学のかつての指導教授である。自分の意にそむいて国際政治などに手を染めたうえに、私学の教授のくせに、学会の中でも勢力を伸ばしつつあった。

この教授は、陰で中村の悪口を流した。

「上司の言うことを聞かない勝手な人間である。人間的にも最低だ」と、会う人会う人に話した。もちろん、でたらめの話であるが、社会的地位のある人間に、そう言われると、ついつい信じてしまうのが人間の性である。中村は研究はできるが、人間的には問題があるという噂が広まっていった。

この頃、田村は、ある見合いを中村に勧めた。

当時、田村は大学新設のために、政治家ともつきあっていた。やはり、許認可となると政治家の支援が必要になる。その中で、与党民自党の実力者である野中雄二とも懇意になった。

野中は、論客として知られており、田村とも気があった。そして、野中から自分の一人娘の婿としてふさわしい人間を紹介して欲しいと頼まれたのだ。

田村は、後輩の中村を銀座の料亭で野中に紹介した。野中は、中村の名前は、新進気鋭の国際政治学者として知っていたようだが、面識はないということであった。中村にあった野中は、すぐに中村を気に入ったようである。

野中は、これからの政治家は、腹芸でのしていくことは難しいと考えていた。国会論争においても、野党の攻撃にも真正面から堂々と渡り合える人物でなければならない。そのためには、幅広い見識とともに、論理的な思考を持つことが必要である。中村はそのめがねに適ったのである。

すぐに中村と野中の娘恭子の見合いの席が設けられた。

中村の父親は、東北の地方都市で市役所の職員を務めていた。息子の見合い相手が大物国会議員の娘と聞いて、あまりにも釣り合いがとれないと、最初は反対であったが、息子が相手を気に入ればそれでよいと折れた。

恭子は、何不自由なく育てられたこともあって、相手を思いやるといふ配慮に欠ける面はあったが、とても華やかな雰囲気をもとっていた。中村のことも気に入ったようである。すぐに結婚が約束された。

中村の結婚式は壮大に執り行われた。中村の両親は質素な結婚式を望んだが、与党の大物議員の一人娘の結婚式ということで、新婦側の来賓には、現職の総理大臣や、有力な大臣経験者が列席した。

新郎側の来賓は、大学の学長と、田村の他に、中村の大学のもと恩師である。式の列席者は、中村を、野中の後継者とみなしたようである。いままで、中村を冷遇してきた教授も、この華麗なる閨闈には、服従するしかないと半分諦めた様子であった。

その証拠に、祝辞では

「中村君は、我が研究室が産んだ至宝のひとつであり、その学問的業績を大きく評価している」

と述べた。

結婚後、中村は多忙を極めた。大学教授としての職務の他に、与党のブレーンとしての仕事加わった。

野中は、機会があれば中村を引き立て、いろいろな人物に紹介してくれた。しかし、妻の恭子には不満であった。これでは、中村は自分と結婚したのではなく、野中の養子になったようなものである。

恭子は、結婚して一年ほどすると実家に帰った。新婚の家に居ても、中村は毎日が午前様である。しかも、土日も出かける。野中は、娘には結婚して子供さえできればそれでよいと考えていた。確かに、娘も可愛い、それよりも、自分の政治を継いでくれる後継者も必要である。残念ながら、野中には息子ができなかった。

しかし、野中は自分の子供が娘でよかったと思うことがある。まわりの政治家がバカ息子で苦労している様子を見ているからだ。

できが悪い息子では、地盤を譲っても、すぐに野党に負けてしまう。仲間の渡辺議員の息子の正一は、中学生になった頃から、ぐれて大変だったらしい。今は、アメリカに留学させているということだが、ものになるかどうか分からない。娘だったからこそ、政治家にふさわしい婿をとることができる。その点、中村は政治家として申し分ない。

中村は、恭子とどう付き合っていけばよいか迷っていた。結婚しても、じっ

くり話す機会もない。時間があれば、どこか温泉でも行ってみたいが、大学の休日になると、養父の野中に引っ張り出される。

恭子は小さい頃からわがままに育ったせいで、我慢するということが不得手である。実は、新婚旅行にも行っていないのだ。恭子は次第に中村と口を利かなくなった。それからまもなく、恭子は子供ができない体であることが明らかになった。その話を聞いて、野中はとても残念そうであったが、すぐに、いずれ親戚の子供を養子にもらえばよいと思うようになった。

しかし、自尊心の強い恭子には、このことは我慢ならなかったようである。すぐに離婚を申し出たが、野中はそれを許さなかった。

そんな折、久しぶりに中村は恭子を食事に誘った。恭子は、最初から中村に反抗的であった。そして、食事のあと実家まで送っていくと

「もう二度とわたしに構わないで下さい」

と言われた。

中村は結婚していても、実質的には独身と同じであった。中村は、恭子が不憫でしかたがなかったが、どうしようもなかった。

野中も、以前ほど中村を連れまわさなくなったが、恭子との離婚は決して許さないと断った。中村を自分の後継者にしたい。その気には変わりはなかったのだ。

田村は、そんな中村のなぐさめ役になった。

その当時、田村は不動産業だけではなく、交通分野にも進出していた。バス、タクシーの会社を買収し、さらに私鉄の会社も手に入れた。不動産を有効に活用するためには、公共交通の整備が重要になる。そして、自分が進みたかった学問分野にも貢献するため、黎明学園大学を設立していた。

中村は、大学の経営と教育はきちんと分けるべきであると田村に忠告した。教授が、経営にまで口を出すようになると、本来の業務である研究や教育がおろそかになる。教授が大学の経営に深く関わるようになると、その利害関係によって学科運営が左右されるようになる。学生にとっては決して利益にはならないのだ。

田村は、傷心の中村を銀座の店によく連れて行った。そこで、横山怜子に出会った。

怜子は、田村が行きつけの店に勤めているお気に入りの子であった。何よりも、その明るさが素晴らしい。

田村がよくよしている時には、よく励ましてくれた。会社を大きくしてきた田村には、それなりに悩みも多い。

怜子の口癖は

「くよくよしないこと」

であった。

いつも、微笑みを忘れなければ、自然と心は晴れてくるというのが怜子の自論である。

怜子の父親は、代々続く老舗の菓子店を経営していた。怜子が高校の時に、父は事業の拡大を図った。

銀行から資金を借り入れて、老舗のあった土地に六階建ての貸しビルをたてた。その一階を店舗として使い、それより上階を事務所として貸しだすことにしたのだ。

最初は、順調であったが、ある時を境に急激に業績が悪化した。近くに、大型の貸しビルが建設され、店子がすべて移ってしまったのだ。賃貸料が入って来ないので、銀行への返済だけがかさむ。

やがて、担保にしていた店の土地を銀行に奪われることになった。事業を進める時は、あれだけ下手に出ていた銀行は、最後は雀り取るように土地を奪っていった。

親戚一同は、怜子の父を責めた。地道に経営していれば、財産を失わずにすんだはずだ。それが、銀行員の甘言に惑わされて、老舗ののれんをつぶすことになった。

その後、驚くべき事実が明らかとなった。実は、銀行と、貸しビル業者はグルだったのである。

この不動産業者は、どうしても老舗の土地が欲しかった。そこで、それを騙し取るために、銀行員と組んだのだ。うまい言葉で、ぼんぼん育ちの怜子の父に取り入り、店の拡張を行わせる。その後、近くに貸しビルを建て、相場よりも安い賃料で貸す。

当然、経営は苦しくなり、借金の返済が滞る。そして、最後には担保の土地を奪ってしまう。悪徳業者の典型的なやり口である。怜子の父は、銀行員をなじったが

「法的に悪いことは何もしていませんよ」

の一点ばりで、取りつく島もなかった。

怜子は、高校を何とか卒業した。そしてピアニストになる夢をあきらめ、銀座のホステスになることを決意した。

その頃、父親はすっかりやる気を無くしていた。借金も抱えている。娘の大学進学など、もってのほかである。そんな時でも、怜子は父を励まし続けた。

「お父さん、くよくよしないで。何も命を奪われたわけではないでしょう。これから頑張れば何とかなるわよ」

父は、怜子をお嬢さん大学に進学させ、いずれは、どこかの老舗に嫁がせようと考えていた。それが水商売である。自分の迂闊さのために、家族を犠牲にし

てしまった。

怜子は、銀座の店で、すぐに人気ものとなった。何しろ性格が明るい。それに、もともと歴としたお嬢さんである。その所作には、そこはかたない上品さが漂っていた。田村も、すぐに怜子が気に入った。怜子が席にいと、それだけで酒席が楽しくなるからだ。

田村の部下のひとりが不祥事を働いたことがある。信頼していただけに田村は大いに消沈した。

怜子は

「田村社長、ひとには誰にでも魔がさす時があるわ。きっと、何か事情があったはずだ。彼だって、後悔していると思うの。それよりも、今回のことをいい教訓にして、今後に生かせばよいでしょう」

と助言した。

「それよりも、楽しいことを話しましょう」

怜子には、なぜか人を和ませるところがあった。

客どうしが喧嘩をしても、怜子が間に入ると、すぐに喧嘩は収まった。怜子は、人を本当に憎むということがない。そして、自分を気に入ってくれるひとには、心を開いてくれた。

田村は、山田の事件のことを聞いた時、横山が、母怜子の性格を受け継いでいると思ったのである。

中村も、怜子には大いに和ませてもらった。自分の人生に失敗したと思い込んでいる時であったが、怜子は自分の過去のことを話して、世の中にはもっと苦労をしている人が大勢居る。中村の人生は恵まれている方だ。それを嘆いていたのではバチが当たると言った。

中村も思った。確かに自分の人生は恵まれている方だ。自分の境遇を嘆く前に、それを受け止めた上で前に進んでいく。その方がどんなに建設的であろう。

最初は、田村に連れられて銀座の店に出かけていたが、次第に中村は、ひとりのときでも店に通うようになった。

怜子は

「銀座の店は高いので、ひとりで来ない方がいいわよ」

と諭したが、中村は

「元気を貰いに店に来ているのだから平気だよ」

と言った。

中村が店に行くと、怜子は中村の専門の国際政治の話を知った。怜子は自分が大学に行けなかった分、学問に対するあこがれは強かったのである。怜子は、中村が話す国際的なパワーゲームに大きな興味を示した。ニュースでは分からない国際政治の裏側は、とても魅力のあるものであった。

しばらくすると、怜子は、中村と店の外で会うようになった。銀座の店では、いくら中村が高収入とはいえ、負担は大きい。

ふたりとも忙しい身分であるので、会える時間は短かったが、その時間を楽しみにするようになった。中村は怜子にとって、家庭教師のような存在となった。

そのふたりの仲が恋人のそれになるまで時間はそれほどかからなかった。中村は、自分には妻がいるが、完全に別居状態であることを話していた。

最初は、気づかなかった田村だが、次第に中村と怜子が付き合っていることを察するようになった。銀座の店に行ったときの二人の様子を見ているとそれとなく分かる。二人は隠しているつもりかもしれないが、ちょっとした仕草に二人が互いに好意を抱いているのは明らかだった。

田村は最初は、中村に裏切られたような気がした。嫉妬をしたのかもしれない。しかし、中村のいまの境遇を考えると、やすらぎが必要かもしれないと二人の仲を公認した。

ただし、野中にこのことがばれては不愉快になるだろう。二人には慎重になるように命じた。もちろん、中村は妻の恭子とは完全に別居状態である。最近、恭子は結構遊びまくっているという噂だった。中村は妻を責める気にはなれなかった。

怜子に子供ができたと告げられた時、中村は本当に喜んだ。怜子は、子供のことを話したら、中村がどんな反応をするか心配したが、あまりの喜びようなので逆に不安になった。

中村は立場上、子供を認知できないが、一生、不自由はさせないと約束した。そして、怜子は銀座のホステスを辞め、中村が購入したマンションに住むようになった。実は、怜子は中村に世話にならなくとも十分な貯えがあったのだが、中村の好意に甘えることにした。

子供は、男の子で、横山喬と名づけられた。中村は、両親に怜子のことを話し、孫の喬のことも話した。しかし、両親は野中家に遠慮して、孫の顔を見にすることはなかった。

しかし、これは中村の勘違いである。実は、横山は父方の祖父母には会っていた。最初に会ったのは、幼稚園の頃である。横山が通う幼稚園に年老いた夫婦がたずねてきた。最初は、園長は面会を断ったようだが、老夫婦から事情を聞いて、面会を許してくれた。

横山のことを見ると、ふたりは本当に愛おしそうに、頭をなで抱きしめてくれた。それから、時折、この老夫婦は横山のもとに現れた。

やがて横山は、この老夫婦は

「自分のおじいちゃんとおばあちゃんではないか」

と思うようになったが、父の中村には秘密にしておいた。横山がねだると、祖父母は何でも買ってくれた。中村には内緒にしているが、横山はいまでも祖父母と頻繁に連絡をとりあっている。

怜子の父は、最初は横山の誕生に腹を立てたようだが、孫の顔を見たとたんに、すっかりおじいちゃんの顔になった。

その頃、怜子の父は、怜子の支援で、小さな菓子店を始めていた。かつての職人も帰ってきてくれていた。こじんまりとした店ではあるが、老舗の看板を出すようになっている。和菓子のブームもあって、店は結構繁盛していたのである。

怜子は

「お父さん、店もなんとか復活できたし、孫の顔も見れたからいいんじゃない」とあっけらかんとしたものである。

しかし、親戚からは怜子が私生児を産んだと陰口を叩かれているらしい。言いたい人には言わしておけばいいのだ。

田村は、野中との関係もあり、表だって横山親子の支援はできなかったが、何かにつれて相談に載ってきたという。

実は、怜子の父をだました銀行員と不動産業者は田村が手を回して、失脚させていた。彼らは、怜子の父だけではなく、ほかの人間も、同じような手口で騙していたのだ。

田村は、彼らの詐欺にうまくごまかされたようなふりをして、実は、その悪事の証拠をすべて保管していたのだ。銀行員と不動産業者は、それまでは、慎重に事を運んできていた。このため、悪事が発覚しても、罪を問うことはできなかったのである。

田村は、ふたりにとっては、一生に一度あるかないかの儲け話を持ち込んだ。そのうえで、ふたりが法を犯すように仕組んだのである。さすがの悪党も、金に目がくらんでしまった。それに、まさか、自分達が騙している田村に、実は、騙されているということには、まったく気づかなかったのだ。

田村は、証拠をそろえて、検察に告訴した。

怜子の父は、自分を騙した銀行員が逮捕されたことを新聞で知って、大喜びしたという。怜子の父が、再び、菓子舗をはじめようと気を取り戻したきっかけは、この逮捕であった。

父は

「世の中も捨てたものではない。悪い人間には、必ず天罰が下る。俺も、もう一度頑張ってみるか」

と言って、小さい店を始めたのである。

怜子は、あっけらかんとした性格ではあるが、息子の将来は案じていた。

そして、何よりも心配なのは、父の中村が息子の喬にめろめろなことだった。こんなに甘くていいのかと思ってしまう。もっと父としての威厳を発揮してほしいと思うのだが、毎日会えない中村の気持ちを思うと、あまり責めることもできなかった。

このように、横山は、両親の祖父母や父から甘やかして育てられてきたのだ。おおらかすぎるほど、おおらかに育ってしまったのも仕方のないことなのである。

田村から両親の過去の話聞いて、横山は安心した。父が母のことを本当に愛しているということは肌では感じていたが、銀座のホステスを囲っているやり手の政治学者というイメージを父に対して持っていたことも確かだった。それが、そうではないと分かって、安心したのである。

「それじゃ、田村理事長は母の若い頃からの知りあいだったんですね」

「ああ、本当にいい子だった。もし、私が独身だったら、中村なんかには渡していなかったろうな」

「そうだと、理事長が私のお父さんという可能性もあったんですね。あっそうか。それでは、僕は誕生していないということになりますね」

ふたりは笑った。

横山は思った。

母は熱心な教育ママであったが、どこかあっけらかんとしたところがあった。横山が勉強に身が入らなくとも、そのうち何とかなるといふ雰囲気があったのである。実は、横山が危機感を感じなかった背景には、母のおおらかな性格が多分に影響している。

しかし、田村の話では父も母も、なかなかの勉強家ということだ。どうして自分のような子供が生まれたのであろうか。

